

遙かなるパゴダ

元野戦高射砲第三十六大隊
第一中隊大東亜戦争回想録

昭和五十一年十一月十日印刷
昭和五十一年十二月八日発行

遙かなるパゴダ（実費頒布価格二、〇〇〇円）

編集

南友会回想録編纂委員
寺嶋雪雄・大出莊藏・阪本利保・品川實

発行

南友会
東京都大田区南蒲田三丁目六の二十八
（大出方）

電話〇三―七四二―三七二三

印刷

詩文字美術印刷所
東京都板橋区板橋四丁目三十八の五
電話〇三―九六一―一六五一（代）

禁・無断転載・脚色・上演・上映

遙かなるパゴダ目次

序

遙かなるパゴダ出版について

遙かなるパゴダ

詩

主戦場 泰・ビルマ地図

想い出の写真集

追悼の歌

野戦高射砲第三十六大隊第一中隊戦歴の概要（遺稿）

第一編 応召・満洲北安鎮

応 召

1 まえがき……三

2 応召から出征まで……四

北安鎮

1 北安鎮へ……八

2 北安鎮の演習……九

3 北安の鯰……一〇

大東亜戦従軍のつれづれ

満洲の思い出

思い出の玄海灘

大島知義
金田紀一郎
寺嶋雪雄
阪本利保
品川 實
阪本利保
青木正四郎

品川 實

大出莊藏

瀬端武男

鈴木邦男

石原正一

石原正一

第二編 仏印進駐

仏印……………本 棒 重 雄 一九

1 西貢(サイゴン)……………二九 2 露宮……………三三

4 プノンペン……………三四

サイゴンの日の丸……………大 出 莊 藏 二六

コンポントラッシュ……………大 出 莊 藏 二八

コンポントラッシュの想い出……………加 藤 友 衛 三三

満洲から仏印へ……………阪 本 利 保 三四

第三編 泰国戦線 (一)……………三九

泰国進駐……………本 棒 重 雄 四二

1 ドンムアン飛行場……………四三 2 ドンムアンよりの便り……………四三 3 バンコック、ドンム

アンよりチェンマイへ……………四四 4 チェンマイ……………四六 5 チェンマイ飛行場……………四七

6 ランパン……………四九 7 バンコック埠頭……………五一

ドンムアンの想い出……………大 出 莊 藏 五三

チェンマイ……………大 出 莊 藏 五七

1 チェンマイへ……………五七 2 緒戦……………五九

第四編 ビルマ戦線……………六五

第一章 マグウェーの陣……………六七

マグウェーの花……………阪 本 利 保 六七

マグウェーの戦闘……………星 野 修 夫 七七

マグウェーへ……………大 出 莊 藏 七九

1 タジよりエナクションへ……………七九 2 マグウェー……………八〇 3 マグウェーの陣……………八二

マグウェー陣中余談……………大出莊藏 八六

1 運動会…八六 2 石原君負傷の一件…八七 3 忠さん禿鷹釣りのこと…八八

マグウェーの激闘……………大出莊藏 九一

1 田中隊長・熊久保君斃る…九一 2 熊久保君の最後…九四

蛇談義……………大出莊藏 九五

1 蛇談義…九五 2 続蛇談義…九七

第二章 トングー……………二〇〇

野島隊長の思い出……………星野修夫 二〇〇

ビルマ戦線での思い出話……………石原正一 二〇三

大蛇の来襲……………萩原富栄 二〇四

トングー滞陣……………大出莊藏 二〇五

1 トングー滞陣…二〇五 2 第一次交替兵到着後に帰還者出発…二〇九

ビルマ戦線へ……………酒井栄助 二一一

1 ラングーン上陸…二二 2 トングーのチンポペン村の陣地にて…二二

3 爆撃の思い出…二五

碁と将棋と麻雀……………大出莊藏 二一六

第三章 メイクティラー及び周辺……………二二三

思い出あれこれ……………酒井栄助 二二三

1 恐ろしかったメイクティラー陣地…二三 2 ピンダレ街道陣地にて…二三

3 楽しかった外出の思い出…二三 4 野島少尉の思い出…二三 5 サジ陣地空襲

初体験…二四 6 サジへ機動防空…三五 7 メイクティラーの思い出…三六

8 (詩) メイクテイラー会戦……二六

ビルマの思い出……………鈴木邦雄……………二九

戦いにやぶれて……………品川實……………二三

メイクテイラー……………大出莊藏……………二六

ビルマメイクテイラー地区対戦車戦闘の記録……………寺嶋雪雄……………四六

1『一の谷発令』……二四六 2 トングー到着……二四九 3 マグウェー……二五一 4 部隊

長交替・金田中隊前線へ……二五三 5 メイクテイラー……二五九 6 英機甲師団

突入……二六〇 7 サジ街道ぞいの陣地……二六六 8 トングー街道ぞいの陣地……二七一

9 観測山の第一分隊……二八九

ビルマに思う……………高塚元治……………二〇七

1 イラワジ会戦……二〇七 2 最前線……二〇八 3 切込隊……二三三

4 メイクテイラーの反攻……二三四 5 移動命令……二三三

激戦のメイクテイラー……………中根博……………二三

メイクテイラー……………加藤友衛……………二三

小隊長として……………中根博……………二五

戦場の幻(ああ、柴田軍曹)……………中根博……………二六

一個の水筒(メイクテイラーの陣地にて)……………阪本利保……………二四〇

野島中隊長殿とメイクテイラー最後の思い出……………星野修夫……………二四二

ビルマの随想……………石川仁男……………二四六

涙の記(遺稿)……………清水正……………二五三

思い出の記……………野島一雄……………二五九

一番うまかった西瓜……………塚本重治……………二六〇

……………阪本利保……………二六九

第四章 ビルマから泰国へ……………二七一

ビルマからタイへ……………二七一

泰緬国境……………二七五

転進中のあれこれ……………二七七

1 ノンブラドックの猛風……………二七六

2 アパロンにて……………二七六

3 キンサイヨークの炊
事場で……………二七九

4 アナクエンの空襲……………二八〇

5 カモイ(盗賊)……………二八〇

6 貨車を押す……………二九〇

7 風葬を見る……………二九二

8 泰緬国境……………二九三

9 泰領ベック山を降る……………二九四

10 食べられぬ貝……………二九六

第五編 泰国戦線 (二)……………二九九

第一章 バンコック防空・終戦……………三〇一

帰ってきたバンコック……………三〇一

1 再びドンムアンの陣……………三〇二

2 終戦前夜……………三〇三

バンコック埠頭で……………三〇五

加藤茂郎上等兵を偲ぶ……………三〇〇

ビルマから泰へ……………三〇四

バンコック(ドンムアン)……………三〇八

終戦を迎える……………三三〇

品川 實……………三三〇

中根 博……………三三八

石川 仁……………三二四

阪本 利保……………三〇五

品川 實……………三三〇

第二章 抑留生活

ナコンナヨーク	中根博	三三三
私の思い出	相原林造	三三五
私のノートより	酒井栄助	三三八
笑い話（実話）	酒井栄助	三三二
抑留生活	大出莊藏	三三三
1 抑留生活始まる	三三三	
4 ノンホイ行き	三三六	
5 続ナコンナヨーク	三四四	
6 B 定量	三四六	
7 抑留生活の終期	三四九	
想い出	広沢直藏	三五二
抑留生活	本棒重雄	三五三
思い出すまに	飯島秀夫	三五七
行軍の思い出	星野修夫	三五九
武装解除から帰国まで	品川實	三六〇

第六編 戦塵の詩集

短歌	中山	三六三
スケッチ	中山	三六五
南の島に雪が降る	中山	三六六
戦塵の句	山崎としを	三六八
短歌	大出蒼民	三六九
復員想い出の詩	箕沢重智	三七六
1 復員船はゆく	本棒重雄	三七九
2 煙草	三八一	
3 船中の飯	三六三	
4 船の暑さ	三六四	

5 九州見ゆる……三八四

短歌……………本棒重雄……………三八六

短歌……………加藤友衛……………三九〇

第七編 戦後遙かに……………三九一

当番兵の思い出……………星野修夫……………三九三

思い出の匂い……………青木良通……………三九四

故青木さんを偲んで……………星野修夫……………三九六

南友会に思う……………立川卓司……………三九七

亡き戦友を偲ぶ……………立川卓司……………四〇八

戦後感……………品川實……………四一三

青木正四郎君……………大出莊藏……………四一五

座談会（野戦高射砲第三十六大隊第一中隊大東亜戦争徒軍の思い出）……………四二〇

あとがき……………大出莊藏……………四四九

第一編

応召・満洲北安鎮

応 召

品 川 實

1 ま え が き

早いもので、いつの間にか六十年の歳月が流れてしまった。その人生の流れの中の昭和十六年より二十一年迄の五か年は戦争という体験であった。若い生命力とエネルギーを全身全霊にかけて耐え、よくぞ生きてきたという実感が、身にひしひしと感じられる。

——三十数年の歳月が流れ去った今、あの大東亜戦争の、満五か年の戦場生活を思い出すことは私にとつては懐かしいことでもあり、また痛々しいことでもある。護国の鬼となつて戦場の露と消えた幾多の戦友、重傷を負つて後送の途中に死んでいった多数の戦友、重病のまま、ろくな看病も受けず心残していった幾人かの戦友。静かな雨の降る夜など、盃を片手に、ふと当時のことを思い出すと、思い出は次から次へと、走馬燈のように私の脳裡をかけめぐるのである。

2 応召から出征まで

私に臨時召集令状がきたのは、昭和十六年七月七日、七夕祭の当日であった。世にいう赤紙である。かねて覚悟はしていたものの、やはり召集令状がくるまでは、毎日毎日が不安と期待の交錯であった。緊張感と悲壮感の入りまじった複雑な気持で封をあける。七月十五日午前九時、宇都宮野砲第十四聯隊に入隊せよ、との命令である。

そしてうるさいほど、注意事項がこまごまと書いてある。防護上、普段着で入隊すること、出征兵士がよくかけるタスキはいけない、家族や親戚の駅等における見送りは一切禁止、召集された様子は極力見せないことなどである。まるで赤穂浪士の討入り前夜さながらである。

ヨーロッパでは恰もヒットラーの軍団がソ連国境を突破し、モスクワに向け、レニングラードに快進撃中であつた。日本でもどんな意図があつたか知らないが、関特演——関東軍特別大演習と称して、ぞくぞくと満洲へ大軍を集めた。私たちの召集もそれと呼応したものであり、国際的に秘密を要したのであろうか。

聯隊は応召兵でこつた返していた。型通りの身体検査があり、不合格兵は即日帰郷、合格兵にはそれぞれ所属が決められた。古年兵の案内で兵舎に行つてみて、まったく驚いてしまった。何んと兵舎とは名ばかりで、これまでは既に使っていたらしいコンクリート床で、その上にゴザをしいただけである。おまけに窓すらない。しかし、ぶつぶつ不平を言っている暇などありはしない。軍装の支給、私物の返送、武器の授与、使役等々、まったく目の廻る忙しさである。喧噪、罵声、怒号のうちに、二、三日はアツという間に過ぎた。

動員計画は綿密に企てられたのであろうが、イザ編成となると、なかなか思うようにならないものだ。しかし、やっと大隊編成が終ると、大島少佐を隊長に仰いで、以下五百何十名かの戦闘要員が広い営庭に整列した。野戦高射砲第三十六大隊の雄姿であり、私はその第一中隊第一分隊に配属させられた、星一つの新兵である。

夜陰に乗じて、野戦高射砲第三十六大隊はながい征旅についた。待ちに待った出征の門出。ザクザクザクザク——軍靴のひびきも整然と、宇都宮野砲第十四聯隊の営内を後にして、私たちは宇都宮駅頭へ急いだ。夜の何時頃であつたろうか。今は思い出すすべもない。宇都宮といえは、今は平和な商都であるが、当時は全国的にも有名な軍都であつた。そのため出征兵は珍しくないのか、夜の街には人影もまばらであつた。それとも隣組の回覧板で、防諜上うるさく見送りを禁止していたのであろうか。へ臉に浮かぶ旗の波へへ歎呼の声に送られてゝという、歌の文句は私たちにはまったく通用しなかった。静かな、そして厳肅な出征である。宇都宮駅に着いてみると、すでに軍用列車がわれわれを待っていた。しかも、いつの間に積み込んだのか、火砲、弾薬、器材等必要なものはすべて積み終っていたのである。

われわれの乗り込んだ列車は、普通の三等車である。福田さんと衆谷さんが前の席に座り、私と富岡が並んですわった。富岡と私は国府台の教育召集のときの同年兵である。二人とも除隊後召集もなく、三年過ぎた今回が初めての応召である。おのずから話ははずんだ。しかし福田さんは上等兵、衆谷さんは一等兵である。私たちは星一つの新兵だから、前の席を気にしながら、低い声でボソボソ話し合う。いつの間に雨にな

ったのか、窓の外にはしきりに雨が降っている。私たちを乗せた軍用列車は、真夜中の東北線を、ひた走りに赤羽駅へと走りつづけた――。

――私たちを乗せてひた走りつづけた輸送列車は、今しずかに赤羽駅へすべりこんできた。窓の外にはすすり泣くような静かな雨が、しきりに降っている。応召兵たちは、年令もまちまちで、すでに世帯をもっていたものもかなりいたことであろう。窓越しに降りしきる雨を、それぞれ感慨深そうに黙然と眺めている。もちろん、ひとたび応召したからには、誰しも死を覚悟していたであろう。しかし、心の片隅では、何んとかして生きて帰りたいというせつない願いを、ひそかに宿していたのではなからうか。私とても例外ではなかった。ひとたび戦さの場に立つからには、もとより生還は期しがたい、とはいうものの、その反面ひそかに、生きて再び故国の土を踏みたい、と心底に祈りつづけていたのである。まして赤羽は、私にとっては第二の故郷ともいうべき懐しい土地であった。専門校を卒業して初めて就職したのが日本ソーダ赤羽工場であった。私は七年間ここで暮らした。雨の中を静かに輸送列車が動き出したとき、「ああ、これで赤羽駅も見納めになるのかなあ。」と、思わず嘆息したものである。

軍用列車は、東海道線を南へ南へとまっしぐらに走りつづけた。神戸駅へ着いたのは明け方であった。私たちに、行先は一切教えてもらえなかった。ただ漠然と、「満洲へ連れて行かれるのだろう」という予感ばかりはしていた。というのは、関東軍特別大演習のため、全国各地から、応召兵がぞくぞくと、輸送船で日本海

へ送り出されていたからである。神戸駅で、初めて私たちは下車を命ぜられた。

駅前に整列して、戦勝祈願のために湊川神社に参拝した。湊川神社は今の三宮駅前にあって、吉野朝の忠臣、楠正成——つまり大楠公を祀つてある。軍国時代の当時、大楠公、小楠公といえ、日本歴史始まって以来の大忠臣で、神戸港から戦地へ送られる、殆どの部隊が戦勝祈願をしたものである。部隊長の「カシラ―右」の号令をきき、壮重なラッパの吹奏がきこえてきたとき、私は身のひきしまる思いがして、「死して護国の鬼とならん」という覚悟を新たにしたものである。そして五年後に計らずも生きて故国の土を踏むことができたとき、出征当時の情景が思い出されて、新たな感慨が、ひとしお私の胸を浸したものである。五年間の戦場生活で、相当な戦死者、戦傷病者を出し、しかも生きて帰ってきた我々も疲れ果てて敗戦の悲哀を心から味わいながらの帰国。出征の意気と敗戦の帰還とあまりにも隔てあるものであった。

神戸港で待機している輸送船に私たちは高射砲、弾薬、器材その他の必需品を輸送船に積み込んだ。肉体労働になれてない私にとって、この積載作業は、まったくたいへんな重労働であった。そして行先も告げられないまま、再び夜陰に乗じて、私たちを乗せた輸送船は、茫洋たる大海へ乗り出して満洲へ向かつていったのである。暗い船倉の中で、富岡君や、新たに知った斎藤君、横田君、花塚君たちと話し合いながら、不安な気持ちで、なかなか寝つかれなかったことだけが、今でもあざやかに思い出される。

（閑話休題——これからいよいよ戦場生活が始まるのだが、最後のメイクテイラーの戦闘については、多くの戦友がいろいろ書いているだろうから、メイクテイラーから撤退以後のことを後に書き誌す。）